

ケア役割と成人期男性の発達

水島 洋平

あらまし

本稿の目的は、ケア役割が男性にとってどのような意味を持つのかという問題意識の下、ケア役割を通して成人期男性がどのような発達を遂げるのかに焦点を当て、生涯発達の視点から考察することにある。

近年、わが国においても、ワーク・ライフ・バランスの推進が喫緊の課題となっている。少子高齢化や産業構造の変化により、性別役割分業型家族が後退し、核家族が増加している。それに伴い、育児や介護の問題も変容している。かつて、育児や介護などのケア役割は、主に女性が担ってきたが、男性もケア役割を担う必要性、さらには、ケアに積極的に関わりたいという男性のニーズがあるなど、実態面や意識面での変化が見られる。

本稿では、まず、ケア役割を通じた成人期男性の発達の問題にアプローチする際に、生涯発達の視点を持つことの重要性を指摘した。次に、ケア役割と成人期男性の発達との関連性について明らかにするために、ケアの概念を概観し、成人期男性の発達にとってのケア役割の重要性について指摘した。最後に、ケア役割を通じた成人期男性の発達を考えるうえで有用と思われるHavighurst、Erikson、Levinsonの発達理論の整理と理論から得られた知見を提示した。

1. 問題意識

本稿の目的は、ケア役割が男性にとってどのような意味を持つのかという問題意識の下、ケア役割を通して成人期男性がどのような発達を遂げるのかに焦点を当て、生涯発達の視点から考察することにある。

近年、わが国においても、ワーク・ライフ・バランスが重視されるようになってきている。少子高齢化や産業構造の変化により、性別役割分業型家族が後退し、核家族が増加している。それに伴い、育児や介護の問題も変容している。かつて、育児や介護などのケア役割は、主に女性が担ってきたが、男性もケア役割を担う必要性、さらには、ケアに積極的に関わりたいという男性のニーズがあるなど、実態面や意識面での変化が見られる。

終身雇用や年功序列に代表される日本的雇用システムは、職場優先の組織風土だけではなく、いわゆる「会社人間」、「企業戦士」を生み出した¹。労働市場に置かれている男性の現状を俯瞰すると、長時間労働や過労死などの問題が見られる。フルタイムで働く30代・40代男性の5人に1人以上が、週60時間以上働いており²、男性の多くは時間的にも心理的にも余裕がなく、ケアに関わることは少ない。男性が物理的または機能的に不在といわれる所以は、この状況を示している³。千葉（2004）は、ワーク・ライフ・バランスへの関心が高まった背景として、長時

¹ バク・ジョアン・スックチャ『会社人間が会社をつぶす—ワーク・ライフ・バランスの提案』朝日新聞社、2002年、10－11ページ。

² 男女共同参画会議「仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）に関する専門調査会『「ワーク・ライフ・バランス」推進の基本的方向報告—多様性を尊重し仕事と生活が好循環を生む社会に向けて』2007年7月、20ページ。『フルタイム労働者』とは、週間就業時間が35時間以上の就業者である。以下、WLB調査報告書（2007）と略記する。

³ 柏木恵子「今、父親は—父親と母親の現状」（柏木恵子編『父親の発達心理学—父性の現在とその周辺』川島書店、1993年）、187ページ。

間労働の問題だけではなく、労働者の「中心的生活関心」も変容していると指摘している⁴。

WLB調査報告書（2007）で、職業と育児のバランスをどのように考えているかをみると、育児中の父親のうち、職業と育児に同じくらい関わりたいという者の割合が約7割、母親のうち、父親に職業と育児に同じくらい関わって欲しいという者の割合は8割弱に上っている⁵。このように、男性もケア役割を担う必要性に迫られているだけではなく、男性のケアへの参加の希望や期待が大きいたうかがえる。しかし、男性が家事・育児・介護等に関わる時間は、妻の就業状態にかかわらず30分程度となっており、家事・育児の負担が女性に重くかかっている状況下にある⁶。調査結果からも明らかなように、男女共同参画社会の実現が目指されている現在においても、依然として、「男性は仕事、女性は家庭」という性別役割分業が固持されていることがうかがえる。

このような実態から考えると、ワーク・ライフ・バランス政策は、働く女性の育児・介護支援政策の域を出ているとはいえない状況にある。下夷（2004）は、男女共同参画社会を実現するためには、家族内のケアワークのジェンダー・バイアスを是正することが不可欠であるという立場から、男性の育児参加を進める政策について検討し、女性の就労参加を進める政策に較べて、男性の育児参加を進める政策は遅れていることを指摘している⁷。ケア役割を通した成人期男性の発達を考察することは、ワーク・ライフ・バランス政策が働く女性の育児・介護支援政策の域を脱し、働く男性の育児・介護支援政策

への拡大を促進する端緒になるものと考ええる。

本稿では、まず、ケア役割を通した成人期男性の発達の問題にアプローチする際に、生涯発達の視点を持つことの重要性を指摘する。次に、ケア役割と成人期男性の発達との関連性について明らかにするために、ケアの概念を概観し、成人期男性の発達にとってのケア役割の重要性について指摘する。最後に、ケア役割を通した成人期男性の発達を考えるうえで有用と思われるHavighurst、Erikson、Levinsonの発達理論の整理と理論から得られた知見を提示する。

2. 生涯発達とケア

2.1 生涯発達の視点

本節では、発達とは何かを明らかにするために、発達の概念について概観する。そして、研究の潮流が発達心理学から生涯発達心理学へと移行した経緯について論じる。

2.1.1 発達とは何か

かつて、成達は、その大部分を遺伝的要因に依存する過程と考えられていたが、現代においては、遺伝的要因と同等に環境的要因が重視されている⁸。大野（1998）によれば、成達とは、獲得と消失の2つのプロセスが絡み合って進行する変化であるとし、成達を質量双方から考えれば、成人期以降は必ずしも衰退の時期とはい

⁴ 千葉隆之「ライフスタイルと就業意識—「会社人間」の成立と変容」（佐藤博樹・佐藤厚編『仕事の社会学—変貌する働き方』有斐閣、2004年）、99ページ。

⁵ WLB調査報告書（2007）、20ページ。内閣府『低年齢少年の生活と意識に関する調査報告書』（2007年2月）より作成されたものである。調査対象は、満9歳から満14歳まで（2005年4月1日現在）の青少年の両親（保護者）。父親（自分自身について）：「職業と育児（子育て）のバランスについて、あなた自身はどのようにしたいと思いますか。職業に就いていない方もお答えください」への回答である。母親から見たパートナーである父親に関する回答：「あなたの配偶者・パートナーには、職業と育児（子育て）のバランスをどのようにしてほしいと思いますか。配偶者・パートナーが職業に就いていない方もお答え下さい」への回答である。

⁶ WLB調査報告書（2007）、21ページ。総務省『社会生活基本調査』（2001）より作成されたものである。就業状態は、共働き世帯、共働き世帯のうち夫も妻も雇用されている人で妻の週間就業時間が35時間以上、夫が有業で妻が無業の世帯の3パターンに分けている。

⁷ 下夷美幸「育児における男女共同参画—私的領域のジェンダー変革に向けた家族政策の検討」『大原社会問題研究所雑誌』No. 547、2004年、17—31ページを参照。

⁸ 倉戸直実・倉戸幸枝『発達・学習・教育指導の心理学〔改訂3版〕』（四ツ葉書房、2002年、2ページ。人間は生まれたときに、遺伝や親の地位などによって決定されている固定的な立場ではなく、環境によって発達していく力動的な観点から、人間の発達について解明していく立場をとっている。すなわち、人間の誕生から死に至るまでを常に視野に入れ、系統的に現実の人間の姿を理解しようとする立場であり、それは、ライフサイクルに基づく発達の理解であるとしている。

えず、変化・発達は生涯にわたって続くものであると指摘している⁹。また、服部（2000）は、発達とは、成長を含む成熟に到達するプロセスであり、量と質の両面にわたる展開であると指摘しており¹⁰、倉戸と倉戸（2002）によれば、発達とは、受精から死に至るまでの一生における肉体的、精神的な面に現れる量的・質的变化の過程であるとしている¹¹。

以上の指摘を踏まえれば、発達とは一生涯における質的・量的な変化の過程と定義することができるであろう。

2.1.2 発達心理学から生涯発達心理学へ

高橋（1990）によれば、生涯発達心理学とは、乳児期から老年期までの人間の一生を視野に入れて発達を扱う心理学で、生涯にわたる発達という視点を重視していることが特徴である¹²。発達心理学では、研究対象として成人期以降を取り上げることがなかった¹³。これに対し、生涯発達心理学では成人期以降を重視している。成人期以降の研究が盛んになった背景には、平均寿命の延長が大きな意味を持っている¹⁴。

服部（2000）は、人生におけるどの期であろうと、人間を全体として眺めるなら、プラスとマイナスの両側面が絡み合って変化しており、これを発達と捉えることができるとしている¹⁵。このように、一生涯を一貫して発達の過程とみ

なす観点が、学問的にも確立されてきており、生涯人間発達論はその立場に立っている¹⁶。そして、人間発達のプロセスを検討するうえで重要な点として、以下の3点を指摘している¹⁷。第一に、人間の発達を一生涯の長さで捉えること。第二に、部分的機能の成長ではなく、全体的存在としての人間発達の観点に立つこと。第三に、人間の持つ身体・精神・社会の各側面のいずれをも軽視することなく、調和的・総合的に眺めることである。

山内（2001）は、人間の一生のライフサイクルを問題にする場合、成人期・老年期を含めた人生全体の発達理論、あるいは発達段階についての考えが展開されなければならないと指摘し、このような壮大な理論は、今日においても未だ十分に展開されていないとしている¹⁸。その理由として、以下の2点を指摘している¹⁹。第一に、加齢とともに人間の個人差がますます大きくなり、発達段階を画することが難しくなっていること。第二に、成人期と老年期の研究がこれまで十分に行われてこなかったことである。そして、生涯発達の視座が次第に大きく展開してきた背景について、社会・文化的要因を無視することはできないとしている²⁰。

以上、高橋（1990）、服部（2000）、山内（2001）の論考を概観した。初期の発達心理学においては、成人期は青年期の延長として注目度が低かったが、現代における成人期は、あらためてアイデンティティが問われるようになってきて

⁹ 大野祥子「父親であること—子どもの養育者としての役割」（柏木恵子編『結婚・家族の心理学—家族の発達・個人の発達』ミネルヴァ書房、1998年）、150ページ。発達を獲得と消失という2つのプロセスが絡み合って進行する変化と捉えると、成人期以降に対する見方が変化するとした。例えば、青年や若い成人と高齢者を比較すると、その能力や課題に対する対処や解決の方略は異なっている。それは、年齢や経験年数などの量的な差ばかりではなく、質的にも異なるものであり、どちらの方が優れていると一概にいえるものではないとしている。

¹⁰ 服部祥子『生涯人間発達論—人間への深い理解と愛情を育むために』医学書院、2000年、2ページ。

¹¹ 倉戸と倉戸（2002）、3ページ。

¹² 高橋恵子「発達心理学の新しい展開—生涯発達心理学とは何か」（無藤隆・高橋恵子・田島信元編『発達心理学入門Ⅱ—青年・成人・老人』東京大学出版会、1990年）、207ページ。

¹³ 山内光哉「人生全体からみた青年期以後—生涯発達の段階」（山内光哉編『発達心理学（下）〔第2版〕』ナカニシヤ出版、2001年）、12ページによれば、成人期以降が研究対象にならなかった理由として、成人の能力は定常化し、老年になると減衰するのみと考えられていたからであるとしている。

¹⁴ 柏木恵子「生涯発達における父親であること・父親となること」（柏木恵子編『父親の発達心理学—父性の現在とその周辺』川島書店、1993年）、128ページ。

¹⁵ 服部（2000）、1ページ。

¹⁶ 同書、1—2ページ。服部（2000）は、人間の一生涯という全行程を発達のプロセスとして捉え、「生涯人間発達論」という表現を用いている。

¹⁷ 同書、6ページ。

¹⁸ 山内（2001）、13ページ。

¹⁹ 同上。

²⁰ 同書、12ページ。

おり、発達心理学は人間の一生涯を問わなければならないようになってきている。

2.2 ケア概念

本節では、ケアとは何かを明らかにするために、Mayeroff (1971) と森村 (2000) のケアの概念を概観し、比較検討を行なうことを目的とする。

2.2.1 Mayeroffのケア概念

Mayeroff (1971) は、ケアを「人をケアすること」と「人以外のものをケアすること²¹⁾」とに分けて考え、さらに、「人をケアすること」を「他者に対するケア」と「自分自身に対するケア」とに分けている。そのうえで、ケアの主要要素として、「知識」、「リズムを変えること」、「忍耐」、「正直」、「信頼」、「謙遜」、「希望」、「勇気」の8つを提唱している²²⁾。

また、ケアの主要な特質として、「ケアを通しての自己実現」、「過程の第一義的重要性」、「ケアする能力とケアを受容する能力」、「ケアの対象が変わらないこと」、「ケアにおける自責感」、「ケアの相互性」、「ケアであるといえる範囲」の7つを提唱している²³⁾。

Mayeroff (1971) によれば、ケアとは、比較的長い過程を経て発展していくような他者との関わり方を指している²⁴⁾。そして、ひとりの人格をケアするとは、「最も深い意味で、その人が成長すること、自己実現することを助けるこ

と」であるとしている²⁵⁾。例えば、わが子をケアする父親を考えた場合、父親が、子どもが自ら成長しようと努力していることを理解し、尊重する。また、子どもの成長したいという要求に応えることで、子どもの成長を助けるとしている²⁶⁾。そのうえで、「ケアは一つの過程であり、展開を内に孕みつつ人への関与のあり方であり、相互信頼と質的に変化していく関係を通して、成長するものである」と指摘している²⁷⁾。

Mayeroff (1971) は、「私は、自分自身を実現するために相手の成長を助けようと試みるのではなく、相手の成長を助けること、そのことによってこそ、私は自分自身を実現するのである」と述べている²⁸⁾。このように、ケアを通しての自己実現について、相手をケアすること、その成長に対して援助することが、自己を実現する結果につながると指摘している²⁹⁾。また、ケアに携わることで起こる自己の変化について、「ケアに携わると、その周辺の活動および価値がおのずと序列化され、ケアが第一義的なものとなり、他の活動や価値は第二義的なものになると指摘している³⁰⁾。そして、ケアを心掛ける親は、以前には気付きもしなかった子ども達の福祉や成長に関係する社会的要因の重要性を認識するとしている³¹⁾。

2.2.2 森村修のケア概念

森村 (2000) によれば、ケアとは、自己犠牲に代表されるような関わりでもなければ、単なる強者から弱者への援助でもなく、それは、相互依存関係の一つのあり方であるとしている³²⁾。

²¹⁾ Mayeroff (1971) によれば、新構想 (哲学的または芸術上のアイディア)、ある理想、ある共同社会をケアすることを例に挙げている。

²²⁾ Ibid, pp.33-65

²³⁾ Ibid, pp.67-90

²⁴⁾ Ibid, P.184によれば、他者との関わり方の例として、友情や相互の信頼が、お互いの関係を深め、質的变化を遂げることににより、初めて生まれてくるものであるということに似ているとしている。

²⁵⁾ Ibid, P.13

²⁶⁾ Ibid, P.13

²⁷⁾ Ibid, P.14

²⁸⁾ Ibid, P.70

²⁹⁾ Ibid, P.69によれば、作家は、自分の構想をケアすることにおいて成長し、教師は、学生をケアすることによって成長し、親は、子どもをケアすることによって成長するとしている。

³⁰⁾ Ibid, P.110

³¹⁾ Ibid, P.111

³²⁾ 森村修『ケアの倫理』大修館書店、2000年、はじめに、5ページ。ケアが自己犠牲でないのは、それが自己へのケアをも含んでいるからである。

なぜ、我々はケアを強調しなければならないのか。なぜ、我々はケアを必要とするのか。なぜ、自己や他者をケアしなければならないのかという3つの問いに対して、ケアは「私たちの〈生〉に『意味を与える』ことができるからだ」と述べている³³。

そして、我々がケアに従事することは、ケアされる人が成長していくための契機としてだけでなく、ケアを実践する我々にとっても重要であると指摘している³⁴。そのうえで、ケアする人とケアされる人との相互性を強調することが重要であり、さもないと、ケアは単なる自己犠牲と重なり合い、相互性ではなく一方通行の関わりになる危険性を孕んでいるとしている³⁵。

また、ケアの実践には、複数の人たちの関わり合いによる相互的な支え合いのシステムが背景に存在する必要があるとし、そのシステムは人的資源のみならず、社会や国家などによる制度的な整備も含めた、一つの「ケアシステム」として考慮されなければならないと指摘している³⁶。

2.2.3 ケアの概念の比較検討

以上、Mayeroff (1971) と森村 (2000) のケアの概念を概観した。以下では、論点およびそれぞれの貢献をまとめる。まず、Mayeroff (1971) の論点をまとめると、以下の2点に集約される。第一に、ケアの持つ意義を、ケアそのものに見出していること。第二に、ケアを通してケアされる人が自己実現に向かうばかりでなく、ケアする人自身も変化し、成長を遂げるとしている点である。次に、森村 (2000) の論点をまとめると、以下の2点に集約される。第一に、配慮としてのケアという観点を身につけるためには、他者のことを気遣い、支え、援助していくとい

う関係を作り上げていく必要があること³⁷。第二に、ケアという実践的行為は、「他者へのケア」と「自己へのケア」という両方の方向性を持ったケアが成立して初めて成り立つとしている点である³⁸。

Mayeroff (1971) と森村 (2000) の論考の共通点は、ケアの関係には、「相互性」があると強調している点である。Mayeroff (1971) の貢献は、「自分自身をケアすること」に触れていることにある。また、ケアという行為を通して、ケアする人自身も変化・成長を遂げるとしている点は重要な指摘である。森村 (2000) の貢献は、心が傷ついた人へのケア、高齢者のケアなど、具体的な事例を挙げて分析している点にある。また、ケアを実践するうえで、「ケアシステム」の必要性を指摘していることは、現代社会においては特に重要である。

2.3 生涯発達とケア—成人期男性の発達についてのケア

生涯発達とケアの関係においては、個体の中で完結する営みと捉えられる発達が、子どものときにはケアされ、成人してからケアする立場となり、年老いてケアされるようになるという循環される営み、すなわちライフサイクルであるという認識を持つことが重要である³⁹。

では、成人期男性の発達についてのケア役割とは、どのような意味を持つのだろうか。育児や介護などのケア役割は、依然として女性が担うことが多い。しかし、結婚や出産後も就業継続する女性の増加に伴い共働き世帯が増加し、必然的に男性もケア役割を遂行するニーズが高まっている。また、みずから育児に関わりたいと希望する男性も増加するなど、自発的な要因が絡んでいることも無視できない⁴⁰。

これまで、成人期の発達に関しては、しばし

³³ 同書、91ページ。

³⁴ 同書、86ページ。

³⁵ 同上。

³⁶ 同書、115-116ページ。

³⁷ 同書、205ページ。

³⁸ 同書、221ページ。

³⁹ 庄司順一「ライフステージと心の発達」『母子保健情報』第54号、2006年、23ページ。

⁴⁰ 詳しくは、佐藤博樹・武石恵美子『男性の育児休業一社員のニーズ、会社のメリット』中央公論新社、2004年、99-124ページを参照。

ば、職業社会化が取り上げられてきた。職業生活に入る男性と、主にケア役割を担い、子どもの発達に関与する女性という性別化された成人の発達研究のなかで見過ごされてきたのは、親自身とりわけ男性の発達である⁴¹。

成人以降の人格的・社会的発達は、職業社会化、政治的態度など社会人としての側面で扱われてきた⁴²。柏木（1993）は、多くの成人男性が結婚し家庭を形成し、家族の一員となることにより、どのように発達を遂げるのかという関心が薄かったことを指摘している⁴³。また、社会人となることにより、いかに社会化され成長するのが問われること以上に、親になることにより子どもから学び、育児体験を通して鍛えられ、人間として成長することが大きいかを指摘している⁴⁴。

柏木（2003）は、子どもとの関係や子どもを育てる親の営みは、子どもの発達にとって重要であるばかりではなく、育てる親、大人の側にとっても他の人間関係や活動とは異なった意味を持ち、その発達に資すると指摘している⁴⁵。そして、混乱に満ちた育児体験は、親にとって鍛錬の機会であり、それゆえに「育児は育自」と実感されるとしている⁴⁶。また、育児は、企業社会とは異なった価値観と行動を親に要求し、育児体験は自分のなかに子どもの部分を活性化させ、男性を人間として豊かにするとしている⁴⁷。

大野（1998）は、父親に固有の役割は何か、母親の役割とされてきたものは、本当に父親による代替は不可能なのかという問題を検討している⁴⁸。その結果、これまで生物学的な性差によると思われた父母の差異の一部は、個人差で説明ができるとしている。すなわち、一般的に母親の役割と思われる事柄には、父親でも代替

可能なものがあるということである⁴⁹。これまで、親といえば母親一辺倒だった心理学研究の世界で、父親の存在がにわかに脚光を浴びるようになったことにより、育児における母親の優位性に疑問を投げかけることになった⁵⁰。その結果、「子どもの養育に関わる親の役割についての知見は、『生物学的な性（sex）』と『社会的に学習された性（gender）』を明確に区分したうえでの問い直しを迫られている」としている⁵¹。

矢澤・国広・天童（2000）は、育児期の若い男性たちの多くが、仕事と育児の両立を困難と感じ、性別役割分業の前提である「夫（父親）＝稼ぎ手」という男性アイデンティティを受容し、矛盾と葛藤を抱え込んでいる様相を明らかにしている。矢澤ら（2000）が実施した調査によれば、自己アイデンティティとして重視していることは、「父親としての自分」が98%と最も多く、以下、「妻や家族が望むこと」（97%）、「夫としての自分」（94%）、「友人との付き合い」（94%）、「一家の稼ぎ手としての自分」（93%）と続く⁵²。この結果を見る限り、父親役割を自己アイデンティティの重要部分と認識しており、ケアラーとしての父親の意識は強いかに見えるが、実際には仕事中心の生活を送っている現実が浮かび上がる。

柏木（2003）は、男性の育児・家事参加の意味について、性別役割分業がもたらす妻の不満や夫妻間の心理的乖離は、夫の育児・家事参加により改善されるが、夫の育児・家事参加の意味はそれだけではなく、子どもとの関係の変化、さらには、男性自身の発達を豊かなものにする⁵³と指摘している。そのうえで、性別役割分業が最適性を持っていた状況下では、男女はそれぞれその役割にふさわしい資質を備え、発達さ

⁴¹ 詳しくは、柏木恵子・若松素子「『親となる』ことによる人格発達—生涯発達の視点から親を研究する試み」『発達心理学研究』第5巻第1号、1994年、72-83ページを参照。

⁴² 柏木（1993）、129ページ。

⁴³ 同上。

⁴⁴ 同書、130ページ。

⁴⁵ 柏木恵子『家族心理学—社会変動・発達・ジェンダーの視点』東京大学出版会、2003年、185ページ。

⁴⁶ 同書、196ページ。

⁴⁷ 同書、255ページ。

⁴⁸ 詳しくは、大野（1998）、166-177ページを参照。

⁴⁹ 同書、178ページ。

⁵⁰ 同書、181ページ。

⁵¹ 同書、181-182ページ。

⁵² 矢澤澄子・国広陽子・天童睦子「父親のケア意識・職業意識とジェンダー秩序—子育て期の男性のライフスタイルと市民生活調査から」『経済と社会：東京女子大学社会学会紀要』第30号、2002年、1-28ページ。

⁵³ 柏木（2003）、254ページ。

せることが必要かつ有用であったとしている⁵⁴。しかし、近年の社会の変化により、性別役割分業の最適性は機能を喪失し、いわゆる「男らしさ、女らしさ」というジェンダー規範にそった発達では済まず、男女とも男性性、女性性を兼ね備えた資質が求められていると指摘している⁵⁵。

3. 理論的枠組み

本章では、ケア役割を通した成人期男性の発達を考えるうえで有用と思われるHavighurst、Erikson、Levinsonの発達理論の整理と理論から得られた知見を提示する。

3.1 Havighurstの理論

Havighurst (1972) によれば、発達課題とは、「人生の一定の時期、あるいはその前後に生じる課題であり、それをうまく達成することが幸福とそれ以後の課題の達成を可能にし、他方、失敗は社会からの非難と不幸を招き、それ以後の課題の達成を困難にする」という⁵⁶。

Havighurst (1972) は、発達課題の源泉を3点提示している⁵⁷。すなわち、(1)歩行の学習、青年期に異性に好かれるように振舞うことの学習などの身体の成熟から生じる課題、(2)読むことの学習、社会的に責任ある市民として社会に参加することの学習などの社会の文化の圧力から生じる課題、(3)職業の選択と準備、価値尺度や人生観を打ち立てることなどの個人的な価値観や志望から生じる課題である。そのうえで、6つの発達段階を取り上げており、それぞれの発達段階に応じて発達課題を提示している。すなわち、Ⅰ. 幼児期・早期児童期 (0歳～6歳) →Ⅱ. 中期児童期 (6歳～12歳) →Ⅲ. 青年期 (12歳～18歳) →Ⅳ. 早期成人期 (18歳～30歳) →Ⅴ. 中年期 (30歳～60歳) →Ⅵ. 老年期 (60

歳以降)の6段階である。以下では、成人期男性の発達を考えるために、早期成人期と中年期を取り上げる。

早期成人期の発達課題として、Havighurst (1972) は、以下の8点を提示している⁵⁸。すなわち、(1)配偶者の選択、(2)配偶者と暮らすことの学習、(3)第一子を加え、家庭をつくること、(4)育児の遂行、(5)家の管理、(6)職業に就くこと、(7)市民としての責任を引き受けること、(8)気心の合う社交集団を見つけることである。

また、中年期の発達課題として、以下の7点を提示している⁵⁹。すなわち、(1)10代の子どもが責任を果たせる幸せな大人になるように援助すること、(2)大人の社会的な責任、市民としての責任を果たすこと、(3)職業生活で満足のいく地歩を築き、それを維持すること、(4)大人の余暇活動を作り上げること、(5)自分をひとりの人間としての配偶者に関係づけること、(6)中年期の生理学的変化の受容とそれへの適応、(7)老いてゆく親への適応である。

3.2 Eriksonの心理・社会的発達理論

3.2.1 Eriksonの理論の概要

1950年に初版が出版された『幼児期と社会』は、子どもの精神発達に及ぼす歴史的、文化的、社会的要因に新しい意味づけをしたものであった⁶⁰。Eriksonは、人間の経験や活動を環境へ適応するための行動に統合していく積極的な能力として自我を捉え、自我の統合が、社会的組織という土壌のなかでどのように進み、また、どのように損なわれるかなど、自我が社会と結ぶ関係について問うている⁶¹。さらに、「自我同一性」というErikson独特の概念を用いて、変化のなかにありながらも内的連続性という感覚で捉えうる人間の心理的基盤の形成を、漸成論的発達理論として体系づけた⁶²。

⁵⁴ 同書、262ページ。

⁵⁵ 同書、262～263ページ。

⁵⁶ Havighurst (1972), P.3

⁵⁷ 以下、(1)から(3)は、*Ibid.*, pp.6～7

⁵⁸ *Ibid.*, pp.125～142

⁵⁹ *Ibid.*, pp.143～158

⁶⁰ Erikson (1963), P.214

⁶¹ *Ibid.*, P.214

⁶² *Ibid.*, P.214

Eriksonのライフサイクルには、「epigenesis（漸成）」という独自の意味が包含されている。Erikson and Erikson（1997）は、心理・性的並びに心理・社会的な発達を身体的に基礎づけるものとして必要不可欠な有機体的原理は、「epigenesis（漸成）」であるとしている⁶³。「epigenesis（漸成）」とは、一つの項目が時間的・空間的に他の項目の上に生じてくるという考え方であり、Eriksonのライフサイクルのそれぞれの発達段階は、順序を飛ばすことなく、前のものを土台にして次のものが発達すると意味づけがなされている⁶⁴。

Eriksonは、Freudの心理・性的発達理論⁶⁵を中核に発展させつつ、人生の8段階における発達課題の理論を構築した。8つの発達段階に対応した「心理・社会的危機」は、Ⅰ．乳児期の「基本的信頼 対 基本的不信」→Ⅱ．幼児期初期の「自律性 対 恥・疑惑」→Ⅲ．遊戯期の「自主性 対 罪悪感」→Ⅳ．学童期の「勤勉性 対 劣等感」→Ⅴ．青年期の「同一性 対 同一性の混乱」→Ⅵ．前成人期の「親密 対 孤立」→Ⅶ．成人期の「生殖性 対 停滞性」→Ⅷ．老年期の「統合 対 絶望」の8つである⁶⁶。

Eriksonは、8つの発達段階それぞれに対して、「virtue（人格的活力）」を提示した。Erikson and Erikson（1997）によれば、「virtue（人格的活力）」は、人生の発達段階における同調傾向と失調傾向の葛藤から現われる心理・社会的な人格的強さを表すものである⁶⁷。服部（2000）は、「virtue」は「徳」や「美德」と訳される場合が多いが、「人格的活力」「人格的強さ」と訳したほうが、真意に近いとしている⁶⁸。

8つの発達段階に対応した「virtue（人格的活力）」は、Ⅰ．乳児期の「hope（希望）」→Ⅱ．幼児期初期の「willpower（意志）」→Ⅲ．遊戯期の「purpose（目的）」→Ⅳ．学童期の「competence（適格）」→Ⅴ．青年期の「fidelity（忠誠）」→Ⅵ．前成人期の「love（愛）」→Ⅶ．成人期の「care（世話）」→Ⅷ．老年期の「wisdom（叡智）」である⁶⁹。これら8つの「virtue（人格的活力）」は、互いに関連性が深い。なぜなら、「virtue（人格的活力）」は、それぞれの発達段階の危機の解決と発達課題が達成されるなかで獲得されるからである⁷⁰。

以上、Eriksonの理論を概観してきたが、その重要な特徴は、自我機能と社会的現実、生物学的存在の三者が相互性という概念で統合されているところにある⁷¹。

3.2.2 成人期の心理・社会的危機と人格的活力としての「ケア」

成人期において、人は社会のなかで自分の場所を占め始め、社会が産み出すものを発展させ、完成させようと手を貸す⁷²。Erikson and Erikson（1997）によれば、成人期には、「生殖性 対 停滞性」という重大な対立命題が与えられており、この「生殖性」は、子孫を生み出すこと、生産性、創造性を包含するもので、自分自身のさらなるアイデンティティ発達に関わる新しい存在や物、また観念を生み出すことを表わしている⁷³。

家庭における「生殖性」を考えた場合、結婚、出産、育児が中心的な課題となる。服部（2000）

⁶³ Erikson and Erikson (1997), P.29

⁶⁴ 服部（2000）、8ページ。

⁶⁵ 同書、6ページを参照。Freudが、性的エネルギーが行動や性格を規定するという心理・性的な発達論を唱えたのに対し、Eriksonは、その理論に影響を受けつつ、独自の心理・社会的な発達論を展開した。すなわち、Freudが、全ての人間的事象を性欲によって説明しようとしたのに対し、Eriksonは、自我とその働きを社会、文化、歴史的状況の諸条件との相互作用の中で把握していく方法論的立場をとり、発達論もその視点を軸にして理論化した。

⁶⁶ 詳しくは、Erikson and Erikson (1997), P.34およびP.73の図式を参照。

⁶⁷ Ibid, p.71

⁶⁸ 服部（2000）、10ページ。

⁶⁹ 詳しくは、Erikson and Erikson (1997), P.34およびP.73の図式を参照。

⁷⁰ 服部（2000）、11ページ。

⁷¹ Erikson (1963), P.231

⁷² Ibid, p.228

⁷³ Erikson and Erikson (1997), P.88、服部（2000）、111ページ、無藤ら（2004）、126～127ページによれば、「生殖性」には、（自分の）子どもを産み育てることだけでなく、地域社会の子どもや若者を育てること、学問的、技術的、職業的な後輩を育てること、次世代に残すものとして、芸術作品、建築物、技術、思想、哲学に至るまで、およそ人の手や知恵、情熱により生み出されるものの全てが含まれるとしている。

は、成人期の「生殖性」は、父親となる男性と母親となる女性のそれまでの成長・発達に大きく依存しており、成人期の「生殖性」も他の時期と同様、それまでの発達のプロセスの上に成立するものであるとしている⁷⁴。そして、核家族化、少子化の傾向が顕著な現代にあつては、家庭における「生殖性」は、未だ十分なモデルを持たぬ新たな課題となつてきていると指摘している⁷⁵。

Erikson and Erikson (1997) は、成人期における「生殖性 対 停滞性」という対立命題から現われる新たな「virtue (人格的活力)」である「care (ケア・世話)」は、これまで大切に (care for) してきた人や物、観念の面倒をみる (take care of) ことへの、より広範な関与であるとしている⁷⁶。また、ケアは、「慎重深いこと (to be careful)」「面倒をみること (to take care of)」「気遣うこと (to care for)」に当てはまるとしている⁷⁷。

また、Erikson (1963) によれば、ケアは、産み出されたものに対する関心であり、また、それによって、放棄できない義務感に伴う両面価値的感情を克服することができるとしている。そのうえで、人間は他者から求められることを願う要求を持っていると考えており、それゆえ、自分の産み出したもの、育てねばならないものを護り、ケアするとしている。すなわち、ケアは、相互補完的な側面を持つと捉えられている⁷⁸。

3.3 Levinsonの理論

Levinsonは、その著書『人生の四季』において、それぞれの発達課題の働きを強調する理論を構築している。そして、発達課題の理論化にあたり、工場の労働者、企業の管理職、大学の生物学者、小説家の4つの職業に就いている35歳か

ら45歳までの40人の男性に面接調査を行なった。サンプルとして選ばれた40人は、出身階級、人種的・民族的・宗教的背景、教育水準、結婚経験の有無など多様性に富んでいる。

Levinson (1978) は、ライフサイクルの概念について、以下の2点を指摘している⁷⁹。第一に、出発点(誕生)から終了点(死亡)までの過程、すなわち「旅」という考え方を持っていることである。一般に、ライフサイクルという言い方をするとき、生涯にわたっての「旅」は、人によって、また文化によって際限なく様々な形で進むが、それには万人に共通する一定のパターンがあるとしている。また、その「旅」の途中で数々の影響を受けて、それがその「旅」の内容を決めるとしている。第二に、一連の時期または段階に分けて捉える「季節」という考え方を持っていることである。人生は連続した一定不変の流れではなく、質的に異なる「季節」から成り、それぞれの「季節」は独自の性格を持つとしている。

Levinson (1978) によれば、ライフサイクルは、それぞれ約25年間続く4つの発達期を経て、徐々に進んでいくものである。これらの発達期は一部重なり合っており、前の時期がまだ終わらないうちに、新しい時期に入っていることを示している。この4つの発達期の順序は、Ⅰ. 児童期と青年期(0～22歳)→Ⅱ. 成人前期(17～45歳)→Ⅲ. 中年期(40～65歳)→Ⅳ. 老年期(60歳以降)となっており、各時期にはそれぞれの特性がいくつかある⁸⁰。

Levinson (1978) は、「成人期をより深く、より複合的に捉えようとするとき、個人の本質と社会の本質の両方を考慮に入れなければならない。歴史や文化や社会制度が、一人ひとりの成人の生活に影響を及ぼしていることを認識するだけでは、充分とは言えない。社会科学的な物の考え方や概念に基づく適切なアプローチが必

⁷⁴ 服部 (2000), 112ページ。

⁷⁵ 同上。

⁷⁶ Erikson and Erikson (1997), pp.88～89によれば、乳児期から前成人期に至るまでの発達過程で順次生まれてきた「virtue (人格的強さ)」は、次世代の強さを育むという。

⁷⁷ Ibid, p.74

⁷⁸ Erikson (1963), P.229 によれば、ひとりの個人の発達段階は、関わり合う他者の発達段階と対応して、人間は相互に生きている。したがって、無力な子どもは、自分の欲求を満たすために親の援助を求める。これに対し、親は自分の漸成的発達の課題を全うするために、生殖性の一つの課題として子どもの世話をするという。この相互性が確立したとき、子どもが健康な子どもとなり、親が健全な親となって、両者とも自分の漸成的発達の課題を遂行していることになる。

⁷⁹ 以下の2点については、Levinson (1978), P.25を参照。

⁸⁰ Ibid, pp.46～49

要である」と述べている⁸¹。

3.4 Havighurst、Erikson、Levinsonの発達理論から得られた知見

本節では、前節までで概観したケア役割を通して成人期男性の発達を考えるうえで有用と思われるHavighurst、Erikson、Levinsonの発達理論から得られた知見を提示する。

まず、Havighurst (1972) が提示している発達課題のうち、早期成人期と中年期の課題を取り上げた。早期成人期の発達課題の1つとして挙げられている「育児の遂行」について詳しくみると、親が育児責任を果たすためには、幼い子どもの身体面、情緒面での欲求を満たしてやることを学ばなければならない。これは、子どもをいかに上手に扱うかを学ぶこと、また、自分たち自身のスケジュールを、成長していく子どもの欲求に合わせることを学ぶことでもあるとしている⁸²。この指摘は、子どもの成長に自分を合わせることで、生活関心が公的領域以外へと広がることを意味しており、価値観の変革などをもたらすことにつながるものと考えられる。また、中年期の発達課題の1つとして挙げられている「大人の社会的な責任、市民としての責任を果たすこと」について、男性は職業領域での成功を求めるあまり、市民としての責任を果たす時間がなく、この課題を煩わしいと思うことがよくあると指摘している⁸³。この指摘は、「市民」という言葉を「ひとりの生活者」に置き換えて拡大解釈することにより、ワーク・ファミリー・コンフリクトを考えるうえで有用であると思われる。

次に、Eriksonの理論を取り上げた。Erikson (1963) によれば、ケアは、産み出されたものに対する関心であり、また、それによって、放棄できない義務感に伴う両面価値的感情を克服することができるとしている。庄司 (2006) は、Eriksonのサイクルという言葉に触れ、何が繰り返されるのかについて、それはケアといえるのではないかと述べている。すなわち、ケアされ

る存在であった子どもが成長し、育てる立場になっていくことを示している。そして、発達とは個体の中で完結する事象ではなく、世代を超えて繰り返される営みということができるとしている⁸⁴。

最後に、Levinsonの理論を取り上げた。Levinson (1978) は、人間は成人した後も変化を続け、一定の段階を踏んで発達していくことを明らかにした。成人前期には、男性の多くは家庭よりも仕事を優先する傾向が見られる。Levinson (1978) が調査した男性の大半は、父親役割は非常に重要なものであったとしている。このように、Levinsonの理論は、わが国の父親役割を考えるうえでも有用であると思われる。

しかしながら、わが国の現代男性のライフサイクルは、寿命の伸長だけではなく、高学歴化や初婚年齢の上昇などにより急速に変化の一途を辿っているため、必ずしもHavighurst、Erikson、Levinsonの理論に適合するとは限らない。また、わが国の現代男性にとって、成人期の持つ意味が変容してきていることも留意すべき点である。すなわち、以前であれば、仕事だけに専念し、家庭は二の次という男性が多く見られたが、近年では、ケアに積極的に関わりたいというニーズを持っている者も少なくなく、ケア役割と仕事の両立の葛藤に悩む男性も少なくない。

4. おわりに

本稿では、ケア役割が男性にとってどのような意味を持つのかという問題意識の下、ケア役割を通して成人期男性がどのような発達を遂げるのかに焦点を当て、生涯発達の視点から考察した。まず、ケア役割を通した成人期男性の発達の問題にアプローチする際に、生涯発達の視点を持つことの重要性を指摘した。次に、ケア役割と成人期男性の発達との関連性について明らかにするために、ケアの概念を概観し、成人期男性の発達にとってのケア役割の重要性につ

⁸¹ Ibid, P.23

⁸² Havighurst (1972), P.134

⁸³ Ibid, P.146

⁸⁴ 庄司 (2006), 21ページ。

いて指摘した。柏木(1993, 2003)や大野(1998)の指摘にあるように、男性がケア役割に参加することは、男性自身の発達に資する可能性が高い。

最後に、ケア役割を通した成人期男性の発達を考えるうえで有用と思われるHavighurst、Erikson、Levinsonの発達理論の整理と理論から得られた知見を提示した。その結果、Havighurst、Erikson、Levinsonのライフサイクルに立脚した発達理論は、ケア役割を通した成人期男性の発達を考えるうえで有用であることが明らかになった。しかし、少子高齢化の進展により、これまでの世代以上に、子どもを養育する期間と老親を扶養する期間が重なる、いわゆるサンドウィッチ期間が長くなる傾向がみられ、ライフサイクルも変化していく可能性がある。また、女性が「女らしさ(女性性)」というジェンダー意識に縛られていただけでなく、男性も「男らしさ(男性性)」というジェンダーに縛られることで、仕事以外の自分の生き方をうまく見出せないできた⁸⁵。

伝統的な女性性には、ケアの倫理が密接に結び付いているが、心理・社会的役割における男女平等の理念が浸透しつつある現代においては、男性にも一定以上のケアの倫理が求められる。これまで、男性性においては、職業活動や問題解決行動などが強調される傾向が見られたが、これからは、男性もケア役割を遂行していく必要性が高まるであろう。今後、ジェンダーの視点を盛り込むことにより、Havighurst、Erikson、Levinsonの発達理論のフレームワークを発展させることを課題としたい。

参考文献

- Erikson, E. H. Childhood and Society (Second Edition), W.W. Norton & Company, 1963. (仁科弥生訳『幼児期と社会2』みすず書房, 1980年.)
- Erikson, E. H. and Erikson, J.M. The Life Cycle Completed : A Review (Expanded Edition), W. W. Norton & Company, 1997. (村瀬孝雄・近藤邦夫訳『ライフサイクル、その完結[増補版]』みすず書房, 2001年.)
- Havighurst, R. J. Developmental Tasks and Education (Third Edition), David McKay, 1972. (児玉憲典・飯塚裕子訳

『ハヴィガーストの発達課題と教育一生涯発達と人間形成』川島書店, 1997年.)

- Levinson, D. J. The Seasons of a Man's Life, The Sterling Lord Agency, 1978. (南博訳『ライフサイクルの心理学(上)』講談社, 1992年.)
- Mayeroff, M. On Caring, Harper & Row, 1971. (田村真・向野宣之訳『ケアの本質—生きることの意味』ゆみる出版, 1998年.)
- 伊藤公雄「ジェンダー学入門」(日本ジェンダー学会編『ジェンダー学を学ぶ人のために』世界思想社, 2000年), 1-14ページ。
- 大野祥子「父親であること—子どもの養育者としての役割」(柏木恵子編『結婚・家族の心理学—家族の発達・個人の発達』ミネルヴァ書房, 1998年), 149-184ページ。
- 柏木恵子編『父親の発達心理学—父性の現在とその周辺』川島書店, 1993年。
- 柏木恵子『家族心理学—社会変動・発達・ジェンダーの視点』東京大学出版会, 2003年。
- 柏木恵子・若松素子「「親となる」ことによる人格発達—生涯発達の視点から親を研究する試み」『発達心理学研究』第5巻第1号, 1994年, 72-83ページ。
- 倉戸直実・倉戸幸枝『発達・学習・教育指導の心理学〔改訂3版〕』四ツ葉書房, 2002年。
- 佐藤博樹・武石恵美子『男性の育児休業—社員のニーズ、会社のメリット』中央公論新社, 2004年。
- 下夷美幸「育児における男女共同参画—私的領域のジェンダー変革に向けた家族政策の検討」『大原社会問題研究所雑誌』No.547, 2004年, 17-31ページ。
- 庄司順一「ライフステージと心の発達」『母子保健情報』第54号, 2006年, 19-23ページ。
- 高橋恵子「発達心理学の新しい展開—生涯発達心理学とは何か」(無藤隆・高橋恵子・田島信元編『発達心理学入門Ⅱ—青年・成人・老人』東京大学出版会, 1990年), 207-214ページ。
- 鍾幹八郎『アイデンティティの心理学』講談社, 1990年。
- 男女共同参画会議「仕事と生活の調和(ワーク・ライフ・バランス)に関する専門調査会『ワーク・ライフ・バランス』推進の基本的方向報告—多様性を尊重し仕事と生活が好循環を生む社会に向けて』2007年7月。
- 千葉隆之「ライフスタイルと就業意識—「会社人間」の成立と変容」(佐藤博樹・佐藤厚編『仕事の社会学—変貌する働き方』有斐閣, 2004年), 87-102ページ。
- 服部祥子『生涯人間発達論—人間への深い理解と愛情を育むために』医学書院, 2000年。
- バク・ジョアン・スックチャ『会社人間が会社をつぶす—ワーク・ライフ・バランスの提案』朝日新聞社, 2002年。

⁸⁵ 伊藤公雄「ジェンダー学入門」(日本ジェンダー学会編『ジェンダー学を学ぶ人のために』世界思想社, 2000年), 12-13ページ参照。

無藤隆・岡本祐子・大坪治彦編『よくわかる発達心理学』
ミネルヴァ書房, 2004年。
森村修『ケアの倫理』大修館書店, 2000年。
矢澤澄子・国広陽子・天童睦子「父親のケア意識・職業
意識とジェンダー秩序—子育て期の男性のライフス

タイルと市民生活調査から」『経済と社会：東京女
子大学社会科学会紀要』第30号, 2002年, 1-28ページ。
山内光哉編『発達心理学（下）〔第2版〕』ナカニシヤ出版,
2001年。